

Title	20 世紀末現代日本社会の光と影
Author(s)	丸山, 久美子
Citation	聖学院大学論叢, 7(2): 145-158
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=676
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

20世紀末現代日本社会の光と影

丸 山 久美子

Remarks on the Light and Shadow in Modern Japanese Society at the End of
the Twentieth Century

Kumiko MARUYAMA

As we approach the end of the twentieth century, many serious social problems have arisen on a scale that affects our world. There is vague anxiety everywhere in modern life, especially among the youth. Presented here are results obtained from an analysis of social anxiety. Problems considered include the increasing population of aged persons, the drop in the birth rate, the weakening of the welfare state, the spread of AIDS, the evil effects of drug abuse, troubles arising from ethnocentrism, the rise of neo-Nazism, increasing domestic violence among the young, child abuse, rape, and other violent acts.

The study highlights aspects that have a bearing on social life in the twenty-first century and discussed them from the viewpoint of clinical social psychology.

時間を超えて続く決定が、ある一定の日付の中に、ある
ひとときの中に、しばしばただ一分間の中に圧縮される、
そんな劇的な緊密な時間、運命を孕むそんな時間は、個
人の一生の中でも、歴史の経路の中でも稀にしかない。
ツヴァイク「人類の星の時間」1927

1 はじめに

世紀末現在、地球規模で混乱している世界的危機状況、「病める地球」、「自然環境汚染」などの社会問題は従来、概ね左翼思想の一端としてのイデオロギー的問題提起、または論争のターゲット

Key words; Drug Abuse, Neo-Nazism, Social Anxiety, Soulologie, Collective Unconsciousness

として提示されたために、一般の人々の関心領域からは若干の距離があった。しかし、1991年の湾岸戦争を契機に、一挙に一般の人々の関心はメディアを通して、地球環境汚染、自然の生態系に対する不安が高まり、人類生存の危機感さえ伴い大きく問題が拡大した。民族紛争によって国を失った難民の飢餓状態をテレビを通して、あるいは現地からの識者の報告の生々しい放映やそれに関連した多くの書物が店頭に並び、写真に写った難民の子供の無邪気な表情の中にある厳しい現実を見れば、最早、「沈黙は金」のモットーは剥ぎ取られ、人類愛とは幾らか異なるとしても、日本国全体の世論は彼らに対する支援活動を積極的に起こそうとする運動を開始する程活発に動きだした。本来、日本人は「貧しさ」を美德とする。しかし、今現在、経済的に裕福になった日本は不況に喘ぐ世界の標的になったとしても、近未来の経済的危機に対する漠然とした不安を隠し切れず、先行きに対する心配が無意識のうちに脳裡を掠める。

戦後、世界一の経済的繁栄という現実と直面して戸惑う日本人の本質は、「金持ち日本」の標語を潜在的に忌避しており、ほとんどの国民は自らを「金持」であるとは認識してはいない。物が店頭に溢れ、新品の製品がゴミとして処理され、「ゴミ処理問題」が生活基盤を揺るがし、行政問題にまで発展したとしても、国民の意識は金持ち日本という世界的評価とは裏腹に大抵は慎ましく謙虚で節約と礼節を重んじ、自助努力を基本姿勢として貫いているかにみえる。

貧しさを自らの手で克服する事を美德とする日本人が、他国の貧しさに手を貸し、内政干渉をする事自体、恐らくは、これまで考えられなかった越権行為と思っているのではないか。だが、今や、情報機関は地球レベルで電波を送り続け、世界の国々は一国の価値観、文化、生活習慣だけで身を守る事は出来にくくなり、情報が飛びかい、情報に縛られ、政治も又、同じように情報機関を利用して、国民を管理し、政治も又情報に管理される時代となった。マス・メディアの流す情報に管理された情報社会が20世紀の特徴である。夥しく流された情報に人々の心は倦み疲れ、踊らされ、「屋根裏の哲学者」としての安寧、深い瞑想と思索を何処かに置き忘れたかのようである。ひたすらに無謀な慌ただしさの中で荒れ狂っている「肉体」的存在だけが我が物顔に振る舞い、精神を蝕み、未熟な自我の辿る方向は、ただ刹那的で非現実的な楽観主義に徹し、この時代の狭間で後ろに追いやられた「心」はあえぎ、苦痛に満ちて呻吟する。ここに精神主義という諸刃の剣を携えた精神修行が流行する。筆者の脳裡を掠めるのは古くはマニ教徒の精神主義、ルネッサンス時代に瞬時、疾風怒涛のように出現したフィレンツェのサヴォナローザの神権政治である（1495～1498）。今一度、歴史の示すところを深く考察し、20世紀末の特徴を19世紀末のそれと比較してみるのも、あながち無駄なことではあるまい。

19世紀末、ヨーロッパの文化は産業革命によって、鋼鉄を自由に使いこなせる時代を形成し、精密な技法を用いて鉄のエネルギーを文芸芸術の分野に投射した。数多の芸術家は「労働者の荒れれた手足で作る上げる鋼鉄の器」に反抗し、繊細で個性の極致を歌い上げた「鉄のエネルギー」ともいうべき芸術の極美を生み出した。1894年の「イエロー・ブック」に象徴されるピアズリーの絵は

その典型である。芸術家は、又、創造の世界で、そうした自らの生命を燃焼することの出来る迫力に満ちた反逆者でもあった。彼等の醸す世紀末特有の官能や倦怠にも拘らず、それはなおこの時代においても我々の心に何かを印象づけるのである。筆者の感覚からいえば、19世紀末の様々な創造力を高く評価したい。例えば、1900年のフロイトの「夢の解釈―無意識の発見―」、1902年のパブロフの「条件反射の原理」等である。だが、20世紀は驚くべき破壊と生産が交互に入り乱れる非人間的社会の形成であった。技術革新は先端医療の発展、その他の多くの通信光学、電子工学、コンピュータの開発によって、人間自体が持つエネルギーが奪われる時代となり、芸術は、アニメ、コンピューター・グラフィックなどの放送芸術に吸収された。人類は、古来の伝統的芸術から遠ざかり、情報はコンピューターによって管理され、それは、混乱した政治社会における管理社会の招来をもたらす原因となった。21世紀は、今我々が想像している人類とはおよそかけ離れた「心、精神、魂」の失われたロボットの社会を暗示しているのである。若い青年は自室に閉じこもり、自分の枠を設定し、外界との生身の付き合いを拒絶し、自分一人だけのパソコンの世界に閉じこもり、自閉症の兆候を表し始めるであろう。シングル・ライフ、シングル・セル等の言葉が若者の中に流行し、都会のマンションで一人暮らしをしたいという若者が増え始める。更に、世界中の政治的混乱に乗じて、宗教が身を乗り出すと、かつて、フィレンツェの偉大な銀行家メジチ家が支配して芸術の豪華絢爛が最高潮に達した時に、何処からともなく現れた僧侶サヴォナローラの神中心の神権政治を彷彿とさせる。ある意味で、現在、神権政治に匹敵すると思われる情報政治、即ち、情報によってがんじがらめに縛られ、操作される情報管理政治が遅かれ早かれ到来する事が洞察されるのである。これ以上は最早登る事のできない限界点に達し、追い詰められた時、更には人類がこの地球から半分に減少した時、何処からともなく現れるサヴォナローラを我々は不安のうちに心の何処かで期待する。この期待こそ、人類にしか与えられない唯一の救済願望である。しかし、そこに危険な落とし穴が隠されていることを、知ることも又重要である。神は「狡猾であるが、意地悪ではない」というアインシュタインの啓示が身に沁みるではないか。かつて、フィレンツェに現れた清廉潔白な狂信者サヴォナローラをすら神は人間に心を取り戻す事を促すために与えるからである。今、悲しむことさえ忘れた人類の心に一つの警告が、流行性感冒ならぬ、性感染症「エイズ」の姿を借りて現れる。この世紀末現象は宇宙のどこかで増殖しすぎた人類の淘汰を狙い、万物のエネルギーを操作している何ものかの所作事かもしれないと疑ってみる懷疑精神を、今こそ我々は持つべきではないのか。

2 現代人の危機意識と社会不安の内実

人間の「痛み」は測定出来るのかというテーマで多くの医学者、看護学者、心理学者達と論争した。詰めのところ、免疫学専門の医学者は次のように主張した。即ち、「痛み」は「身体的・感

覚的側面]においては測定可能である。これを身体的・感覚的次元と呼ぼう。人間は言語をもつから精神的苦痛を表現する事によって、痛みを半分測定できるであろう。これを「精神的次元」と呼び、半測定可能としよう。又、社会的経済的状况からくる痛みも存在する。これを「社会的次元」と呼び、測定可能としよう。これら3つの次元はなんらかの方法で測定可能である。ここに第四の次元が存在する。それは霊的次元で、測定不能である。しかし、人間の成り立ちがこのような4次元で構成されているのだとすれば、人間の[本当の痛み]は測定不能である。この様な結論は現代の科学者が決して採用しなかった、実存哲学に基礎付けられた人間観に基づいている。霊(魂)の次元とは如何なるものなのか。ここに、ソウロロギー(Soulologie: 魂学)という新語を持つ臨死期精神医学がある(山中, 1992)。魂を表すソウル(soul)と学問を表すロゴス(logos)を組み合わせで出来たものである。因に、心理学は心を表すギリシャ語のプシケとロゴスを組み合わせたもので、サイコロジーと言う。ソウロロギーは老いと死に関する心理療法を基本として、老人臨床の立場から[魂]のあり方を「老いと死の自己実現」に求める新しい学問分野である。21世紀は[霊魂]を追求し、肉体は有限であっても、もう一つの測定不可能な魂の世界を追求して、魂の無限性を証明する時代になるのではないかという人もいる。決定的に宗教的次元での人類にのみ与えられた神と人間の対話の世界が展開されるといういささかSF的な世界観、宇宙論が浮上し、その反面もっと先へ先へと限り無い夢の実現を生み出す人類の先端科学への宿命的な好奇心は昂進する一方である。医学は今その長い歴史の中で、恐らく最も大きな進歩を遂げようとしている。麻酔の発見、抗生物質の発見など、こうした画期的な偉業も、次の巨大な進歩の前では色あせてみえるに違いない。我々は今や免疫学的な機構の秘密を解こうとしている。間もなく人間の臓器を全て自由に移植できるようになるだろう。ガンの恐怖も過去の話になるかもしれない。移植臓器の不足の問題は、技術革新が益々社会的、法的、倫理的に細分化が予想されるとき、一般社会、特に医学界が失敗を犯した最適例の一つであるに違いない。この様な移植の例にしても、増大する問題を正しく理解し、適切な解決を法制化することに失敗すれば、パンドラの箱を開けることになり、無数の不正の群が起る可能性が生み出されるであろう。医学の進歩の裏側で行われる犯罪事例、移植臓器を作り出すための合法的な医学的殺人を扱った推理小説が氾濫しているが、これらの作品群には近未来に起こるであろう一つの問題点を残している(cook, 1983)。人間の知的好奇心は不可能を可能にしようと血の滲むような努力をする。その結果、新たな「人間の創造」という神聖な神の領域に迫ろうとさえする。これこそ人間に永遠に負わされた宿命である。今一度、創造と破壊行動の繰り返しであった人類の歴史が多く語っている厳然とした歴史的事実を冷静に眺めてみよう。歴史の教訓から学ばない人間は愚かであるといわれるが、人間は愚かで罪深く造られている。歴史は如何なる教訓も人間に与えない様に出来ているらしい。この悲観的観念は遺憾ともしがたい。21世紀を担う青年の明日を憂い、彼らの潜在的危機意識を見つめるとき、我々は近代文明の光と影を現実的な出来事として真剣にとらえ直す必要があるのではないか。

性の解放が性感染症「エイズ」を蔓延させ、原子力という強大な力を有する文明の火が「核」爆弾を製造させたように、人類は少なくとも今現在でさえ、「エイズ」に脅え、核爆弾を抱えた国々に不測の事態で何が起こるか分からない漠然とした不安を抱いている。極論をいえば、人類は性感染症「エイズ」と核爆弾によって死滅すると言う人さえいる。文明の解体はその文明に巣くう内的頽廃から起こると言われている（小林，1994）。だが、いみじくもこの地球の誕生は未だ少年期の域を越えない。地球の大地は残り、ある種の生命は存続する。もし、愚かな人類が己の知的欲望に阻まれて、自らの作り出した文明の犠牲になるとしても、大地に生息する生命体はまた再び活動し始めるだろう。自然の中に生きづく「死と再生」の繰り返しは永遠である。

3 現代日本社会の青年の肖像

20世紀は日本にとってまず日露戦争の勝利から始まる（1905）。この事は、近代日本の急速な西欧文化の取り込みと日本固有の文化の融合をはかる明治近代の文明開花の先鋒となった。だが、その後全世界を舞台にした第一次世界大戦（1914～1918）が勃発し、日本も巻き込まれる。その結果、重要な勢力はアメリカ・イギリス・日本の三国となり、敗戦国ドイツは莫大な賠償金を課せられ、軍備も制限された。にも拘らず、その後ドイツでは国粹的なナチスの進出がめざましく、ヒットラーが政権を握り、総督となり（1934）、独裁的な全体主義体制を確立した。第一次世界大戦では勝利国であった日本は軍部の進出により、ついに第二次世界大戦（1939～1945）に参入し、世界に類をみない広島・長崎への原子爆弾投下によって、日本国は決定的な敗残の焦土と化した。それから未曾有の核爆弾の試練に耐えた日本国は恒久的な平和国家としての道を歩んできた。1955年には既に戦前の生産力を上回り、1960年代には経済的豊かさを足場にして、先端技術の分野でアメリカを凌駕し、更に経済大国へと邁進し、1985年には日米経済力が逆転するまでになった。

因に、国連開発計画の調査によれば、130国について三つの要素：出生時の平均寿命（1987）、成人の識字率（1985）、国民一人当たりの GDP（ドル）（1987）を推計して、それらを総合した「人間開発指標（HDI）」を作成し、順位付けると次のような結果となった。アメリカは0.961、イギリスは0.970、フランスは0.974、オランダは0.984、スイスは0.986、日本が最高で0.996という結果が得られた。日本は最早開発すべきどんな道もないという感じである。世界第一の長寿国となった日本は来るべき高齢人口の増加と出産率の低下によってこれまでの豊かな社会が破綻するのではないかという不安に苛まれている。この現実青年の不安材料を増加させる。アメリカの青年との比較において、日本の青年は高齢人口の増加による負担感が強い。常にこの問題が不安材料の上位にランクされるのである。この問題は日本政府の高齢化福祉対策の不備によるものであると指摘する向きもあるが、それよりも豊かな社会に支えられている現在の日本人青年は故もなく若い豊かな感性を剥奪され、影のように寄り添う精神的荒廃が無意識の層に蓄積され潜在的不安が他の先進諸国

よりも数段強いといえないだろうか。社会的・経済的豊かさが個人の幸福を保証するものではないとフロイトは分析する。なるほど、物質的豊かさには光と影が相互に緊密な関係を持っている。魂の寂寥が青年の精神的苦悩を誘い、激動の20世紀はその末期において出口なき魂の叫びを21世紀に向けて噴射するかのようである。

今日様々な領域、特に医療の分野に台頭してきた関心領域は、青年の心を蝕む不安・危機意識の源泉は「エイズ」という性感染症の発生である。この疾病は長い潜伏期間（個人差がある）を通して発病すれば「死に至る病」となる。この時代の病がかってその時代を風靡したペストと同じ類いのものなのかどうかを我々はその時代の風景から読み取る術もない。但し、ペストは人間以外の動物、ネズミの媒介によるものであり、エイズは人間同士の性的関係によって生じるものである。アフリカの風土病でミドリザルによりもたらされたものであるともいわれているが、依然としてその源泉がどこにあるのかは不明である。エイズには同性愛による感染⁽¹⁾、異性愛による感染、麻薬中毒患者の不衛生な注射回し打ちの3種類があり、そのいずれをみても同じウィルスではないという。変幻万端で利口な得体の知れないウィルスが人間の免疫細胞に侵入したのである。かくして、得体の知れない不思議な病気は生物の生殖器官を通して感染する、即ちこれ以上人間は増殖してはならないと言う戒めを伴ってやって来たかに思われる。「病気の隠喩」(Sontag, 1977, 1988)現象は巷間に流布して止どまることを知らない。誰しもがエイズを天罰と見る社会的風習に従いたくなる。なぜなら、それは白血病の治療薬、血液製剤を除いて自己管理の失敗から罹患する、言わば、自業自得の傾向が顕著に見られるからである。かくして、天罰を与えられた青年はその若い芽をつぶされ、老人の社会が誕生する。無気力になった青少年の行く末に誰が責任を負うことができるだろう。老人はその英知によってこの危難をくぐり抜ける手助けをすることができるであろうか。現代の青少年が「身代わりの山羊：スケープゴート」であるという歪んだ社会構造は日本に特有のものとは思われない。

かくして、現代の青少年はおしなべて「アザゼルの山羊」である(丸山, 1992)⁽²⁾。

ところで、現代日本の社会に生じている社会危機的不安現象を列挙してこれらの現象間に何の様な構造(関連)が存在するのかを分析した結果によれば以下ようになる(Maruyama, 1994)。男女合わせた全体の構造図(図1)から判断すると、第一次元は「環境問題に関する危機的不安を表わす現象」から成り立つ。これらの項目を列挙すれば、「複合汚染」、「地球の温暖化、オゾン層の破壊、酸性雨の増加」、「森林伐採による生態系の破壊」が一群を構成し、「核施設の故障による放射能漏れ、汚染」、「ゴミ処理問題と住民エゴの増大」が隣接している。「資源・食料不足」問題が自然環境汚染と「第3世界の人口増加」、「高齢人口の増加」、「対人関係におけるエゴイズムの増大・世代間の断絶」などの人口問題が一つの群を構成する。「青少年の悪質な非行の若年化」、「エイズの蔓延」、「難民の増加」、「ホームレス人口の増加」が一つの群を構成し、これらは「麻薬公害」、「出産率の低下」、「民族主義・ネオナチズムの台頭」、「家庭内暴力・幼児虐待・レイプなどの

暴力行為の多発」につながり、「環境汚染」グループと「犯罪・暴力問題」グループの間に社会福祉国家の衰退（成長なき社会での福祉）問題が介在する。第二次元は時代的特徴・風俗と思われる問題があげられる。即ち、「アルコール中毒患者の広域化（女性、若年層）」、「新興宗教の氾濫」、「若者のフリーター志向」、「不法就労外国人の増加」、「政治的過激派・テロリズムの横行」、「性別越境社会（男女両性具有時代）の到来」など、この時代特有の世紀末的社会現象が一つのグループに纏まっている。これらは、又、「受験競争の激化」、「離婚の増加と家族の崩壊」、「健康・医療制度の問題」、「不況・倒産・失業」からなるグループと隣接している。更に又、これら二つのグループの間に「国際間の利害対立の激化」「国家の赤字財政の増加」と言う社会不安現象を表す項目が介在している。

このような全体の構造を男女別に分割してそれらの構造を示したのが図2、図3である。図2は男子の2次元空間構造図を示すが、相対的に見れば図1と同様の傾向が見られる。しかし、図3の女子の2次元空間構造図はこの様な傾向とは若干異なる。即ち、第一次元は環境汚染問題を表す社会不安項目で形成されるが、第二次元を表す時代的特徴を表すと思われる社会不安項目が「難民の増加」、「ホームレス人口の増加」、「民族主義・ネオ・ナチズムの台頭」という世界レベルでの不安・危機感を表す項目で構成されている。又、第三次元を構成すると思われるものに、「男女両性具有時代の到来」、「不況・失業・倒産」、「国際間の利害対立の激化」、「離婚の増加と家族の崩壊」、「健康・医療制度問題」、「不法就労外国人の増加」、「受験競争の激化」等が集まっている。この傾向に如何なる道筋が存在するのかはわからない。だが、女子学生の危機意識の中には単純に筋を通せない複雑な感情が込められていることが推察される。

アメリカの大学生には現在自国に生じている社会的悲劇的問題に対して危機感が強く、離婚の増加による家庭の崩壊、ホームレス人口の増加、経済的破綻による犯罪の増大に対する不安や危機感が特に強く感じられた（1990年度「日米大学生の生活実態と意識に関する調査」報告書）。今後期待する社会変化の内容は何の様な内容であるかと言う設問で日米に差の見られたものは「伝統的な家庭のきずなをより大切なものとする」「お金の価値をあまり強調しなくなる」「一生懸命働くことが重要である」と言う項目である。日本の大学生はアメリカの大学生に比べて、伝統的な家庭のきずなを大切に思うことに無関心であり、お金第一主義の傾向が見られ、一生懸命に働くことを肯定しないという結果である。まさに、現在の国家志向が青年の意識に作用している。逆も又真である。青年の価値観の全世界的調査の結果、日本の青年には何か暗い享乐的な影が漂う有様が垣間見え、建設的で自由、かつ柔軟な対応の姿勢が見られず、日本人は性悪説かとの疑問が提示された時期があった。団塊の世代と言われる青年たちが青年期をすごした時期である。彼等は昭和22年～24年の3年間に誕生した青年男女である。彼等は一塊になって、熾烈な競争社会の中に投げ出され、戦後の落とし児として戦争責任を潜在的に背負った大人の同情を買い、適当に甘やかされ、その付けが回ってきたかの如くに、全共闘世代、ビートルズの世代を形成した青年たちであった。それな

図1 社会不安を喚起する社会現象に関する空間布置図（全体）

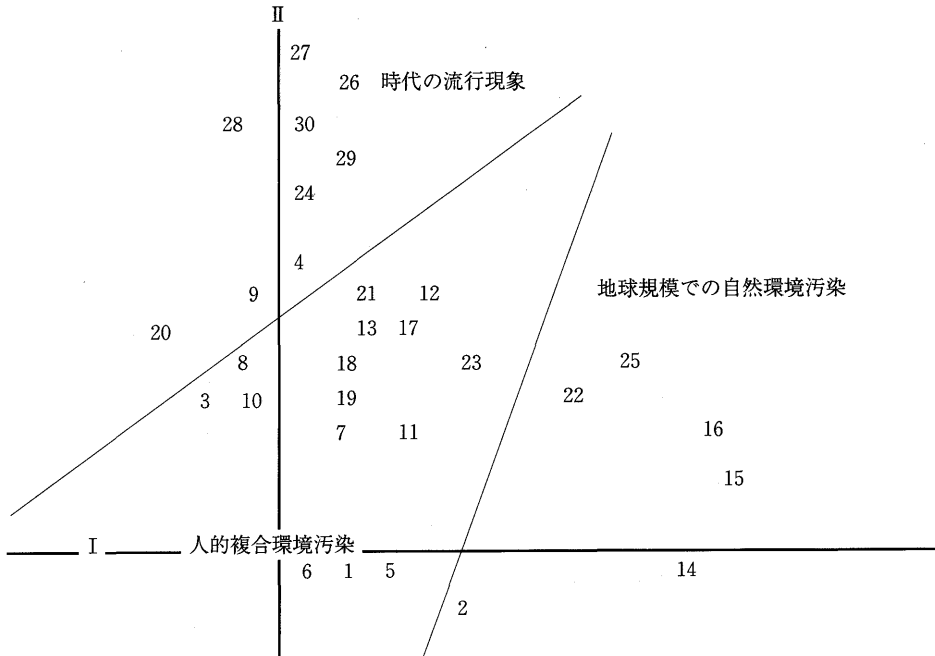


図2 社会不安を喚起する社会現象に関する空間布置図（男子）

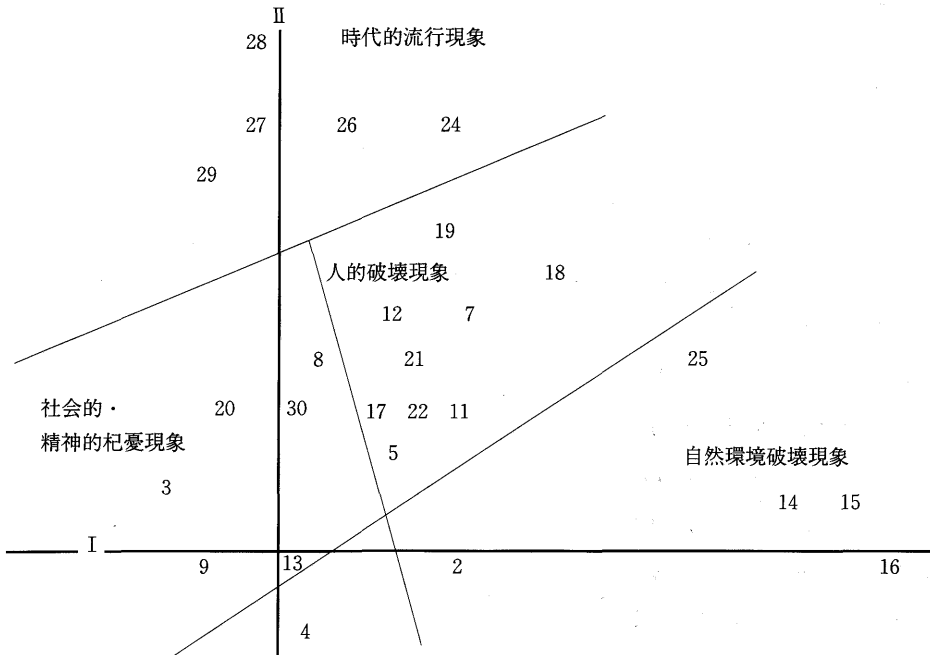
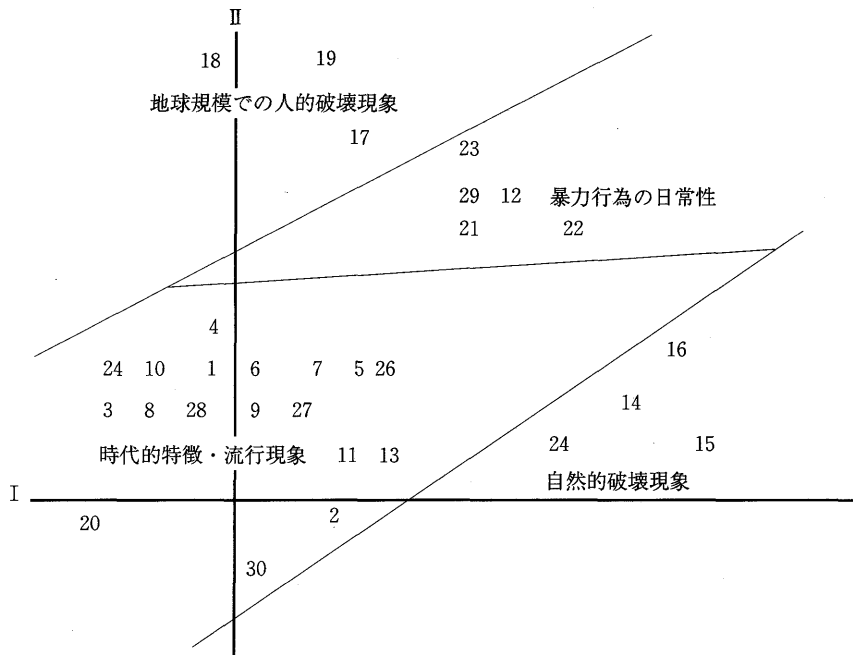


図3 社会不安を喚起する社会現象に関する空間布置図（女子）



(Behaviormetrika. Vol. 21, No. 1, 1994より転載)

注

- (1) 高齢人口比率の増加 (2) 資源・食料不足 (3) 不況・失業・倒産
- (4) 国際間の利害対立の激化 (5) 第3世界人口の激増
- (6) 対人関係におけるエゴイズムの増大・世代間の断絶 (7) 青少年の悪質な非行と若年化
- (8) 離婚の増加と家族の崩壊 (9) 国家の赤字財政の増加 (10) 健康・医療制度の問題
- (11) エイズの蔓延 (12) 麻薬公害 (13) 出産率の低下 (14) 複合汚染の拡大
- (15) 地球の温暖化・オゾン層の破壊・酸性雨の増加 (16) 森林伐採による生態系の破壊
- (17) 民族主義、ネオ・ナチズムの台頭 (18) 難民の増加 (19) ホームレス人口の増加
- (20) 受験競争の激化 (21) 家庭内暴力・幼児虐待・レイプなどの暴力行為の多発
- (22) ゴミ処理問題と住民エゴの増大 (23) 社会福祉国家の衰退（成長なき社会での福祉）
- (24) 性別越境社会（男女両性具有時代）の到来 (25) 核施設の故障による放射能漏れ・汚染
- (26) 様々な新興宗教（オーム真理教、幸福の科学など）の氾濫
- (27) アルコール中毒患者の広域化（女性、若年層） (28) 不法就労外国人の増加
- (29) 政治的過激派・テロリズムの横行 (30) 若者のフリーター（定職を持たず、アルバイトで生活）指向

らば現在の青年は如何なる状況に産み落とされた世代なのであろう。出来るだけ子供を少なく産み、女性も家庭の中に縛られず台所はいつも清潔に保たれ、自前のお料理は出来るだけ避け、レンジで解凍された冷凍食品や食品添加物に慣れ親しんだとたんに環境汚染、複合汚染のために自然食品を買い漁ることで、[ガン]にかかることをくいとめる事が出来ると喧伝され、健康維持のために高価な自然食品の販売が開始された時代の青年たちである。彼らは、大人の都合だけで、多くの時間を無駄にしてきた。つまり、親は一人息子や娘に金品を与えることで安心し、それを愛の代償とし

て子供を育てたのである。青年たちは「金品で人の愛を買う」子供に成長し、一人っ子の故の親の溺愛と過剰な期待感の重圧に自閉的傾向を起こしているのである。若く逞しい体であるにもかかわらず自分の健康を気使い、40代から入るのが自然である人間ドックと言われる医療施設に、若い青年男女が入り浸る。10代からすでにして老人のような生き方、考え方を吸収し、老成しているかの如き青年男女が増加しているのである。

上記の結果から、現在の青年像が彩る日本国の将来に、深い杞憂の念を抱かざるを得ない。アメリカにおいては大都市周辺（ニュー・ヨーク、ロス・アンジェルス、サンフランシスコ等）に集まる青年男女の群れが多く、社会病理問題を引き起こし、そこは家族を失った「家なき子」達、ゲイ・ピープル、麻薬中毒患者の溜り場の様相を呈し、暴力が頻発し、マス・メディアに活気を与え、従来の家族という名称は消失したかにみえ、この国の将来の暗澹とした現実を世界に暴露した。だが、この現実には極く少数派の醸し出す目立った行為の発露であって、アメリカを支えているのはサイレント・マジョリティ（多くは郊外の田園都市、大学都市に居住する中産階級の伝統的で良心的な典型的アメリカ人）であって、彼らが危機的状況にならなければアメリカの危機存亡はありえないと言われていたのは1980年代であった。サイレント・マジョリティは言わば、建国当時のフロンティア精神を持ち、フランクリン⁽³⁾のピューリタンの節約・儉約の精神に生きる一般庶民である。1990年代になってアメリカは地球規模で援助の手を差し伸べるほどの財政的基盤が薄れ、国内にはびこる多くの社会的病理問題に国家財政の大半を投資しなければならない状態となった。消費産業の付けが回ってきたのである。日本はアメリカより10年遅れて同じ道をたどっている。無気力で、国家の何たるかも知らない根無し草の享乐的な生き方、俗にミーハー族と言われる生き方が気楽でよいという若者が大勢を占めるとはいえ、そのような若者だけが青少年を代表するのではない。日本全体の青少年の3分の1に優れた青少年男女が存在すると筆者は予測している。

4 21世紀の課題：集合的無意識の探求

精神分析は人間の心の体系を知る手掛かりとして、顕在的意識と潜在的無意識とを区別する。我々が実際に知っているのは現実の社会における個人の目に見える行動として現れる意識の部分であり、残りの圧倒的な部分は無意識の層に隠されている。

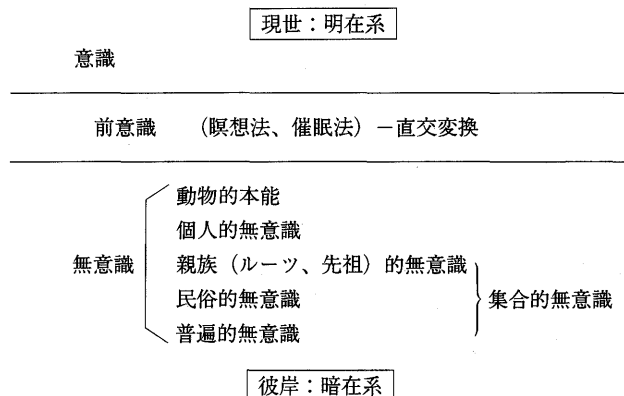
ところで、精神分析の祖であるフロイトとユングの間にこの無意識の概念に関して大きな相違がある。フロイトは個人的な欲望（性欲）が無意識の層を埋めつくしていると主張したが、ユングは無意識の層には二種類あると主張した。ユングはフロイトの無意識は個人的無意識であり、その個人特有のものであるとした。彼は無意識の層には深い底の部分に人類共通の願望、欲望、野心などの普遍的な元型を意味する無意識があり、それを集合的（collective unconsciousness）無意識と呼んだ。

ユングの集合的無意識の仮説は「人間の無意識は、個人に所属するものではなく、全人類に共通であり、つながっている存在」である。これはある意味で、宗教が「神」や「仏」と呼ぶものに限り無く近い概念である。ユングが「自己」と命名する人間の最終的な魂の到達点は「悟り」と同様の意味を彷彿とさせる。その点から、彼の思想は「東洋哲学」に類似点を持ち、西欧思想に若干の距離があると云われている。ユングは精神分析という手法を通して、人間の魂に関する根本原理は、太古の昔から東洋の多くの賢者たちが発見し、語り継いだものと酷似していると指摘した。

深層心理学は「魂の成長過程」,「集合的無意識の仮説」等が基本になって、自分が「自己」に成長して行くプロセスを分析し、本物の自分がいかなるものであるのかを探って行く学問領域であるが、これは、素粒子物理学における明在系－暗在系の仮説、ホログラフィー宇宙モデルなどかなり厳密な数学や洗練された実験方法で考えてゆくモデルとの類似が多く、今や催眠研究の分野では素粒子論の考え方を取り込んで意識と無意識の間に直交変換して相互に往来できる筋道をつけようとしている。まさに「生と死」の端境にある種のスイッチが存在していて、これを押せば自由に無意識の世界を遊泳できるというSF的発想が成り立つ。暗在系とはこの宇宙には知覚不可能な秩序が存在するという理論物理学の仮説構成体である。実はこの理論構成体は精神病患者の心の動きを、辛抱強く観察するという手法から得た仮説であると云う。

精神病患者は明在系（意識）の世界と暗在系（無意識）の世界をなんらかの方法で自由に直交変換しているかのようなものである。図4はユングの集合的無意識の構造を階層的に細かく分断し、理論物理学の仮説構成体の明在系－暗在系によるホログラフィー宇宙モデルとを対応させたものである。

図4 集合的無意識の構造



集合的無意識の階層構造の中で特に親族的無意識とあるのは「先祖の記憶」であり、たとえば自分が5代前の先祖の生まれ変わりのような記憶を持っていて、それが単に偶然ではないと云うことが、精神分析の過程で発見されている。未開人の中にも無意識の部分での結びつきが強く、一人の部族が取りえた情報が、言語で伝達されなくても、いつのまにか部族全体に共有されているという

文化人類学の報告がある。血のつながりが濃密なほど、無意識のレベルの結びつきが強いと言える。これがさらに下部に至ると先祖や親族のレベル、部族のレベル、民族のレベルと下って行き、ついにそれらの細部のレベルを超えた全人類共通の普遍的なレベルに至るわけである。ここに、「無意識」に階層構造があるとすれば「魂」は単独では存在しないということになる。とすれば、宇宙の基本構造は無意識のレベルのネットワークであり、生命を得て生まれる固体は、その大海の表面に発生した小さな泡のようなものである。この類推はフロイトが我々が知覚し認識する意識は氷山の一角に過ぎないという主張と同一である。

21世紀はこの様な「ニュー・サイエンス」と云われる精神世界の磁性的解析へと推移する可能性を含んでいる⁽⁴⁾。

5 おわりに

世紀末は様々な社会問題を提示し、これまで人は多くの困難を克服するべく鋭意励んで来た。20世紀末現在においても文明の発達是人类の生活を豊かにする反面、様々な困難な事態を発生させ、豊かさの裏側にある精神的荒廃が魂を碎き、人はおしなべて「屋根裏の哲学者」を渴望するようになる。人が内省的になればなるほど、様々な新しい発見を生み出す原動力になる。来るべき時代への期待感が湧き出す所以である。

注

- (1) 同性愛は精神分析において「性対象倒錯症」といわれる異常性欲に分類される。

古代ギリシャ文化には同性愛を容認する風潮があり、それは、広く一般化され、「愛」に関する最も高貴で重要な側面の一つとみなされていた。現代社会において同性愛者に市民権を与えようとするとき、多くの場合彼らはこのような古代ギリシャ文化を引き合に出す。倒錯ゆえの美点、つまり、彼らは人好きあいがよく、洗練された上品さ、芸術的感覚の鋭さ、繊細な印象などを挙げる。古代ギリシャでは、女性は受動的に賛美することしか許されない奴隷の境遇に転落し、彼女たちは唯美的男性を生み出す機械としての役割を担っていた。同性愛は、多くの場合、社会的に非生産的で、社会的責任を果たす能力の欠如、怠惰、非行と結びつく。又、ゲイ・ピープルという特殊な集団を生み出している現状には家族制度の崩壊、子供の教育に果たす父親の役割の変化など幼児期の段階ですでに同性愛の土壌が作られている。本来、古代ギリシャの同性愛は美しい同性を賛美、鑑賞すること（プラトニック・ラブ）で崇高な愛のモチーフを保持したのであるが、現在では同性愛者の肛門性交、鶏姦などソドミー（sodomia, ラテン語）による過剰で暴力的な性行為が性感感染症「エイズ」を生み出した原因とも考えられている。

- (2) ユダヤの宗教儀式によると、2匹の雄山羊が犠牲（いけにえ）として神への捧げものとなる。一匹は主なる神のもの、他の一匹は荒野に住むアザゼルという墮落した天使（悪魔）に捧げられる。主なる神への捧げものになる山羊はその場で殺され、その血が祭壇にまき散らされ、聖化されるが、他の一匹の山羊はユダヤ人の罪業を背負い、あてどなく荒野をさまよい、孤独と寂寥と飢餓の果てにアザゼルに引き渡される（旧約聖書レビ記16：11-22）。精神分析ではスケープ・ゴート（身代わりの山羊）コンプレックスといい、ユングの集合的無意識（元型）のシャドー（影）として制圧されている。

ヘブライのスケープ・ゴート供儀は贖罪の日 (Yom Kippur) に悪事を告白して罪を贖うという儀式である。ヘブライ語で贖いに当たる言葉 Kipper は「除去処置」Kippurim と関連している。バビロニア、アラビアでも同様に、浄化、清め、罪の告白、人身御供、清掃するなどの意味である。スケープ・ゴートに選ばれる人間の特徴は醜さ、不具、痙攣性発作を伴う病人 (テンカンなど)、人並み外れた力の強さ、さらには少数民族国家、権力者、王様、少女、成熟した夫人、その民族の価値から除去されたもの (醜いあひろの子) などである。

アザゼルとはスケープ・ゴート儀式にかかわるサタンの化身、ユングによれば集合的無意識における影を表すリビドーで神の似姿をかりた悪の象徴である。つまり、ユダヤ教ではヤハウェの影を消すために反転する天使 (墮天使) が作られ、単純化され、神に反逆する邪悪な存在となった。キリスト教ではアンチ・キリスト (キリストの姿をした悪魔) とよばれる。ユダヤ伝承によれば、かつてアザゼルはヘブライ時代、牧畜民達の山羊神であった。ユダヤの長老達によりアザゼルは女性に化粧をすることを教えて様々な罪惡へと導き、男性には戦争へと導くエロスの本能と攻撃の本能を挑発するサタンとなった。かくして、アザゼルはヤハウェの影となった。ヤハウェのイメージは絶大な威力と創造力をもつ愛の神が破壊的で攻撃的な怒れる隠された神の姿でイメージされるようになった。

アザゼルは次第に、敵対者、非難する告発者、教条的で例外を許さない禁令からなる道德律をもつ人、神の掟に違反する者を閻魔大王のように裁く神となった。

現代では極めてサディスティックな存在となることによって、アザゼルは男性や女性の心理の中で、隣人を非難し、スケープ・ゴート作りに励む告発者、反リビドー的な超自我を持つ者となった。例えば、余りに厳格な親の躾、愛を欠いた家庭にみられる道德的規則、命令の冷酷な親子関係、物質的な利害関係、損得の感情だけで相互共存するヤマアラシ・ジレンマ (近づきたくても相手のトゲに邪魔されて近距離でしか結びつかないヤマアラシのジレンマ) に悩む家庭などである。

又、荒野を流浪する山羊のイメージからは孤独に耐えられる自由人―屋根裏の哲学者、作家、画家、音楽家など、芸術的な仕事や科学者、学者に必要な絶対的な孤独との対話のできる強靱な精神の持ち主のイメージと結びつく。現代の青年がアザゼルの山羊であるならば、21世紀を担うための重い十字架を背負う事のできる人間となりうる所以である。

- (3) Benjamin Franklin (1706-1790) はアメリカの政治家・科学者。貧しい家に生まれ、独学をして印刷業を始める。ストーブの発明、風の実験で雷と電気が同じ事を立証、マルサスの「人口論」の先駆けとして有名な論文「人類の増加に関する観察」(1760)を書いた。アメリカ独立宣言起草者の一人、フランス大使となりパリ条約締結に活躍。アメリカ資本主義の育ての親で、社会学者 M. Weber に多大な影響を与え、「プロテスタンティズムの理論と資本主義の精神」を著作する動機を与えた。
- (4) 1970年代を機に 1: 西欧近代の世界観や科学とその方法を理論的に批判する, 2: かつて無批判に憧れた東洋の文化・思想を冷静に評価し, 3: 究極的には新たな文化と人間観を創造しようとする様々な試みが浮上した。ここに、思想・科学、芸術、生活など多領域にわたる人間観の改革運動を総称して、ニュー・サイエンスと呼ぶ。

様々な試みがなされているが、ここでは科学や宗教を既に出来上がった理論体系として統合するのではなく、それらを生み出した活動の差としての科学と宗教をとらえ直すことに重点がおかれるべきであると言われている。つまり、ニュー・サイエンスの出現は、出来上がった理論としてではなく、理論を生み出す活動としての科学と宗教を再考することを促す一つの世界観であると思われる。

参考文献

- (1) R. Cook 1977 Coma D. Rogers, Ltd., (コマー―昏睡― 林克己訳, 1978 早川書房 早川文庫 1990)
- (2) C. G. Jung 1961 Memories. dreams, reflections Random House (ユング自伝―思い出・夢・思想― 河合、藤縄、井出 共訳 みすず書房 1972)
- (3) 大島清 1992 世紀末の病 光文社文庫
- (4) 大橋良介 1992 日本のなもの、ヨーロッパのなもの 新潮選書 新潮社

- (5) 小林道憲 1994 20世紀とは何であったか NHK ブックス 日本放送出版協会
- (6) 帯津良一監修 1994 ホリスティック医学の治癒力 法研
- (7) P. Kennedy 1993 Preparing for the twenty-first century Random House, Inc., (21世紀の難問に備えて 鈴木主税訳 上・下 草思社)
- (8) S. Sontag 1977 Illness as metaphor 1988, AIDS and its metaphors Farrar, Straus and Giroux (「隠喩としての病」, 「エイズとその隠喩」, 富山太佳夫訳 1992 みすず書房)
- (9) 丸山久美子 1992 20世紀末を生きる現代青年の地球規模での社会不安と危機意識に関する若干の考察 論集「キリスト教と諸学」Vol. 7, 聖学院大学, 女子聖学院短期大学宗教センター
- (10) K. Maruyama 1992 Social anxiety and consciousness of gloval crisis in modern youth The Journal of Seigakuin University, Vol. 5 No. 3, 29-38
- (11) K. Maruyama 1993 Globales krisenbewußtsein und gesellschaftlich Angst bei der gegenwärtigen, japanischen Jugend The Journal of Seigakuin University, Vol. 6, 141-162
- (12) K. Maruyama 1994 Vorstudie zur Struktur globalen Krisenbewußtseins und gesellschaftlicher Angst bei der gegenwärtigen, japanischen Jugend Behaviormetrika, Vol. 21, No. 1, 19-47
- (13) 丸山久美子 1994 緩和医学と臨床社会心理学 「社会心理学研究」, 第9巻 第2号, 123-130
- (14) 山中康裕 1991 老いのソウロロジー (魂学) 有斐閣
- (15) 調査報告書 1990 日米大学生の生活実態と意識に関する調査 学生援護会